

“Roman Fever”における言葉の応酬*

野末幸子

序 “I had Barbara”は真相の暴露か

Edith Wharton (1862-1937) が最晩年に発表した“Roman Fever” (1934) は、同作家の数ある短篇小説の中でも最も広く読まれている作品だが、人気の理由の一つは結末の言葉“I had Barbara”がもたらす surprise ending によるものだろう。その物語構成の緻密さと巧妙さは、結末から遡って細部の描写に意味づけを行うことで説明されてきた (Gerlach, Mortimer, Phelan, White 等参照)¹⁾。それは同時に、この作品の結末解釈が物語の読み筋の一つに定めてきたことを表す。たとえば、Armine Kotin Mortimer は、“I had Barbara”という言葉で、物語のバズルを完成する「最後のピース」に喩え (192)、この短篇は「多様な読みの余地がなく、読者は皆同じ解釈の組み立てをするだろう」と述べている (196)。一方で、小説細部の断片に意味を与えてきた“I had Barbara”という言葉そのものの曖昧性が問われることはほとんどなかったようだ。もし最後のピースが指し示すものが置き換われれば、この小説は従来とは異なる様相を見せるだろうか。

この短篇では、ローマの高台にあるレストランのテラス席で昼食を終えたアメリカ人女性 Alida Slade と Grace Ansley が、眼下に広がる遺跡群を見下ろしながら交わす会話の中で、約 25 年前彼女らが同じ場所で同じ男性をめぐる密かに競い合った娘時代の恋愛事件が蘇っていく。三人称で語られる本作に全知の語りが登場するのはごくわずかな部分に限られ、また二人の女性のうち Grace の内面が直接的に描かれる場面も極めて少ない。読者は主な視点人物である Alida の意識と彼女が主導する会話を通して物語を読み進めていくことになり、これが surprise ending をもたらす仕掛けの大枠になっている。

この会話で明かされる過去の秘密の前半部分は次のようになる。25 年以上前、結婚適齢期の Alida と Grace はともにローマで過ごしていた。当時 Alida は後に夫となる Delphin Slade と婚約中だったが、Grace も密かに彼に恋をしていた。婚約者を奪われ

* 本稿は PHILOLOGIA 第 54 号 (2023 年 3 月発行) に掲載された論文を再録したものである。

1) 特に James Phelan は作者と読者、登場人物同士の関係、各々のレベルからこの短篇の surprise ending の仕組みについて詳しく論じている。

ることを恐れた Alida は、Delphin の名前で手紙を捏造し、Grace を日没後のコロセウムに誘い出した。Alida は虚弱体質の Grace が夜間のローマの冷気と湿気にさらされながら待ちぼうけを食らうことで“Roman fever or pneumonia” (756) にかかることを目論んだのだ。その外出後 Grace は病を患い、Alida は恋敵を排除することに成功した。Grace は病から回復後フィレンツェで母親が選んだ相手 Horace Ansley と結婚、Alida は Delphin Slade と結ばれ、25 年後ほぼ時を同じくして 2 人はそれぞれの夫と死別した。

上記は、会話を主導する Alida の視点から過去の物語を時系列で整理したものだが、この会話の中で物語を動かす核となるのは、Alida と Grace が互いに誤った認識の上に過去の秘密を保持し続けてきたことが判明する点である。Grace はかつて彼女をコロセウムに誘った手紙は Delphin が書いたと信じてきたが、その手紙の記憶が誤りだったという事実を突きつけられる。一方、Alida も自らの筋書きに誤算があったことを知らされる。Grace は嘘の手紙と知らずに Delphin に返事を書いたため、彼は実際にコロセウムに現れ、二人の密会は Alida の知らぬところで実現していた。

ここまでの内容は、Alida と Grace が交わす会話の中で互いに認めている話であり、物語上の真実であると言える。問題は小説の結末部分である。嘘の手紙が引き起こした思わぬ番狂わせに動揺する Alida が悔し紛れに吐き捨てる言葉とそれに続く Grace の応答で物語が閉じられる。

“[...] After all, I had everything; I had him for twenty-five years. And you had nothing but that one letter that he didn't write.”

Mrs. Ansley was again silent. At length she turned toward the door of the terrace. She took a step, and turned back, facing her companion.

“I had Barbara,” she said, and began to move ahead of Mrs. Slade toward the stairway. (762; 下線引用者)

Delphin との 25 年間の結婚生活で「彼」と「彼から得られる全て」を手にしたのは自分で、Grace には「彼が書かなかった手紙」(の思い出)以外に何も無い——Alida の挑発的かつ悪意に満ちた言葉に対して Grace は黙り込む。やがて Grace は一言 “I had Barbara” とだけ発し、その場を後にする。この 3 語の言葉で、Grace は新たな過去の秘密を明かした、と一般的には解釈されてきた。多くの先行研究において、Barbara は Delphin の婚外子であるという前提の上で議論が展開されているように、この言葉の意味するものは明確なものとして扱われてきた (Bauer, Berkove, Hoeller, Mortimer, Petry, Sweeney 等参照)²⁾。もちろん、「彼」をめぐる勝ち負けに執着する Alida は、ほ

2) たとえば、Dale M. Bauer は、Grace が婚外子をもうけたことに関して、Grace を Alida の従

は間違いなく Grace の言葉 “I had Barbara” を “I had his daughter” と解釈しただろう。だが、当の言葉 “I had Barbara” の発話者である Grace の真意は実は明らかにされていないことに注意したい。はたして彼女の発言の意図は Alida の認識と一致しているのだろうか。Grace は本当に真相を暴露したのだろうか。

Rachel Bowlby は、結末の言葉は、字義通りには Grace が Barbara の母であるという事実のみを表すもので、いかなる男性にも言及していないことに注目している (Bowlby 227-29)³⁾。Grace の言葉に母娘関係の勝利を読み取る Bowlby の着眼は、Grace の “I had Barbara” という発話そのものを、夫 Delphin の所有に固執する Alida の会話の文脈から切り離して考察することの有効性を提示していると言える。本稿は、これまで等閑視されてきた Grace の発言の真意を探り、ただ一つの真相を構成すると考えられてきた物語の断片を改めて精査することで、Wharton の名作短篇の結末に新たな解釈をつけ加えようとする試みである。

1. 貫かれる Old New York レディの武装 —— 編み物から毛皮の襟巻きへ

“Roman Fever” 冒頭の時代設定は、作品発表とほぼ同時代の 1920 年代半ばと推定される (Rewis 522)。だが、Grace Ansley という人物は、同世代の Alida Slade が「オールド・ニューヨークの見本 (Museum specimens of old New York)」(751) と揶揄するように外見や振る舞いは「古風な (old-fashioned)」(750) 女性と見受けられる。世紀の転換期から第一次大戦を経て世の女性観が大きく様変わりする中、Wharton は代表作 *The Age of Innocence* (1920) で描いたような形式や儀礼、外見上の “respectability”⁴⁾ が重んじられる Old New York の貴婦人像を受け継いだ女性とし

↘ う「父の法」に対する破壊的キャラクターとみなしている。Hildegard Hoeller もまた婚外子に焦点を当て、Wharton の感傷的な小説を動かしているものは、すでに浸透している伝統に対する女性の反逆であるとし、Wharton 小説において婚姻内の勝利はないと述べている。

3) Bowlby は、結末の Grace の言葉に曖昧さがあるとしつつも、Barbara の父親が Delphin であるという従来解釈そのものを疑問視しているわけではない (Bowlby 222, 226 他参照)。結末の言葉に母娘の絆の強調を見いだす Bowlby の論考は、家父長社会における女性同士のライバル関係、あるいは男性との関係において女性がいかに規範を乗り越えるか、という伝統的なレンズを通して読まれてきたテキストに新たな見方をもたらしたと言える。

4) 本短篇の前半部分の Alida の内面描写に、“Those were the days when respectability was at a discount, and it did the irreproachable no harm to laugh at them a little” (752) とあるように、時代は変化し、かつての New York 上流社会に求められた “respectability” は軽んじられる風潮にあったことが示されている。この記述の直前に、長年 New York で Ansley 家の向かいに住み Grace を観察してきた Alida が古い上流階級の伝統に従った単調な暮らしぶりを眺め続けるのに退屈し、「Grace がもぐり酒場で警察の手入れを受けるのを見た」というネタを思いつき、それを女性同士の昼食会で披露すると大ヒットし、噂が広まった、というエピソードがある。

て Grace Ansley を造形しているようだ。

本短篇において主な視点人物である Alida の思考は直接的で明確に描写されるが、控えて言葉数の少ない Grace の本音を推測するにはその言動の裏を読むことが求められる。だが、意志表示において明快さを好む Alida は、しばしば Grace の曖昧な言動の意味を捉え損なう。小説前半、娘たちが去った昼食後のテラス席で Grace はそれとなく Alida と二人きりの会話を回避しようと試みているが、後者は前者の真意を掴めないという状況が繰り返されていることに注目したい。Alida が娘時代のローマ滞在の思い出を共有しようと、“When we first met here we were younger than our girls are now. You remember?” と話しかけると、Grace は “Oh, yes, I remember” と不明瞭な口調で Alida の言葉尻を繰り返す以上のことはせず、すぐさま “There’s that head-waiter wondering” と会話の流れを遮る (750)。レストランを去ることで Alida との会話を打ち切りたい Grace は、昼食後のテーブルを早く片付けたいウエイター長の存在に気づきそれを口実にしているのだ。しかし Alida は Grace の発言を読み違え、すぐさまウエイター長に “she and her friend were old lovers of Rome, and would like to spend the end of the afternoon looking down on the view” (750; 下線引用者) と伝えた上で気前の良いチップを支払い、さらなる長居の許可を得てしまう。しばらくして、Grace は再び “There’s bridge at the Embassy at five” とうわべは礼儀正しく場を去る提案をするが、眼下の光景がもたらす追憶に浸る Alida は “Bridge, did you say? Not unless you want to... But I don’t think I will, you know” と返答し、テラス席から動こうとしない (754)。これらの冒頭のやりとりが示しているのは、Alida は Grace の表面的な言葉を自らの関心の範囲内でのみとらえ、彼女の真意に気づかない傾向にあるということである。

Alida が容易に読みとれない Grace の内面は、彼女の「編み物 (knitting)」によって表象されている。Alida がレストランを去る気がないとわかると、Grace は “It’s so lovely here; and so full of old memories, as you say” (754) と言いつつ、バッグに忍ばせていた編み物を取り出し手作業を開始する。Grace の言葉と行動が矛盾しているように見えるが、実はそうではない。表向きは古風で退屈な女の暇つぶしである “knitting” には Alida から隠された二重の意図がある。Grace はローマの遺跡群を背景に、Alida と同じ景色を共有せず、彼女だけが保持する “old memories” から成る過去の物語を密かに編んでいる⁵⁾。と同時に、Alice Hall Petry が「回避の戦術 (an evasion

5) Alida と同じ風景を共有せず、一人編み物を始める Grace の姿からは、現在も過去も Alida を排除するしたたかさが透けて見える。たとえば、Grace が Alida の問いかけをかわすために、故意に編み物に集中している振りをする「1, 2, 3—すべり目, すべり目 (One, two, three—slip two)」(754) という言葉は、過去の恋愛の三角関係において、Delphin と婚約している Alida の目を逃れ彼と二人で密会したことを連想させる。

tactic)], 「効果的な心理的武器 (effective psychological weapons)」と表現するように (Petry 165), Grace にとって編み物は、冷静な外見を保ち、Alida の言葉攻めから自らの内面を防御するための武装であると言える。編み物によって、Grace は彼女が避けたいローマと恋愛の話題に固執する Alida との会話において、自身が密かに保持してきた過去の記憶という聖域に Alida が踏み込むことを阻止しているようだ。彼女は編み物に集中しているように見せかけ、詮索するような Alida の問いかけに即座に反応せず、まともな返答を避けるなど自身の外見と発話をコントロールしているのである⁶⁾。

ゆえに、“Her bag, her knitting and gloves, slid in a panic-stricken heap to the ground” (758) という動きは、Grace の武装解除を意味する。彼女だけの秘密であったはずの Delphin の手紙が一字一句違わず Alida によって暗唱される直前、バッグや手袋とともに、編み物が Grace の手から離れたことは、これまで隠されてきた真実が露わになるサインとなっている。編み物を手にしていた時の Grace は娘時代の古代遺跡への夜間外出を追及する Alida に対して、“I—I daresay. I don’t remember” (757), “Perhaps I had” (758) と過去の記憶を否定、または曖昧にする返答をしていた。だが、編み物による武装が解かれると、冷静さを保とうとするも明らかに動揺を隠せない様子で Alida が再現した手紙の内容を認める。「彼からもらった唯一の手紙 (the only letter I ever had from him)」(759) は Alida が書いた偽物だったという真実に直面し涙する Grace は、この会話において初めて内面を露わにする。Alida は手紙の捏造を打ち明けることで、Grace が過去に Delphin を密かに愛していた事実を認めさせた。この時点で、娘時代のローマでの恋愛競争における勝利を誇示すべく Alida が主導してきた会話の目的は達成されたかのようなだった。だがこの後 Grace は、Alida の企みに反し手紙の返事を書いたため Delphin がコロセウムに姿を現したことを明かす。

このように急展開で新事実が明るみに出る会話の流れは結末まで続いているように見える。この点について、編み物を Grace の武装としてその心理を推察する Petry は、Grace が編み物を落とした後再びそれを拾おうとする描写がないのは、もはや秘密を隠し通す必要がなくなったからだと考えているようだ (Petry 165-66 参照)。この読みは、Alida との会話において最終的に優位に立った Grace が古風な貴婦人の仮面を捨て、Barbara が Delphin の婚外子であることを暴露したという一般的解釈を裏付けるものである。

だが、この結末解釈と結びつけられてきた “I had Barbara” という言葉を発する前に、

6) Petry は、Grace が編み物を盾のように使う場面について “it serves as a physical barrier behind which to protect herself from Alida’s probing. Closely aligned with this, the knitting offers Grace an ideal excuse for responding neither immediately nor extensively to Alida’s painful interrogation. Further, it enables her to avoid making eye contact with her tormentor” と説明している (Petry 164)。

Grace は編み物に替わる新たな武装をしているようだ。Delphin をめぐる過去の競争で勝利したのはどちらか、という Alida が執着する会話の文脈は最後まで一貫しているが、それに対する Grace の反応には変化がある。前半場面で観察されたのと同じように、Grace が Alida との会話を打ち切ろうとしている箇所に注目したい。Delphin との密会を告白した後、その件についてさらに話すつもりがないという Grace の固い意思が彼女の動きから読みとれる。

Mrs. Ansley rose, and drew her fur scarf about her. “It is cold here. We’d better go . . . I’m sorry for you,” she said, as she clasped the fur about her throat. (761)

ここで Grace が毛皮の襟巻き⁷⁾を「喉まわりにしっかりと締め付ける」動作は、彼女の再武装を暗示しているようだ。Grace の襟巻きは、ローマの夜の急激な冷え込みから、彼女の「とても繊細な喉 (very delicate throat)」(756) を保護するものである。と同時に、発声器官である喉をかたく防御するという行為は、この後に続く Grace の発話の抑制を示唆していると考えられる。本稿の最初に引用した通り、“I had everything; I had him for twenty-five years. And you had nothing but that one letter that he didn’t write” という Alida の挑発的な言葉に続いて、“Mrs. Ansley was again silent. At length she turned toward the door of the terrace. She took a step, and turned back, facing her companion” とあるように (762)、Grace は即座に返答することを避けている。Grace の沈黙による時差は、彼女が冷静さを取り戻し、Alida が主導してきた会話の流れを断ち切る言葉を探ったことをほのめかしている。Grace が少しの間のあと「テラス席の戸口に向きを変え」「一歩進んだ (she took a step)」(762; 下線引用者) という表現は、彼女がこの会話が繰り広げられた舞台の出口を見据え「策を取った」ことを同時に表している。その後 Grace は Alida の方に向き直り “I had Barbara” と発言している。喉を保護する襟巻きが編み物に替わる再武装だとすれば、Grace は再び自身の内面を防御していると考えられ、この発言は従来信じられてきたほど明快なものではないかもしれない。結末における Grace は、敵意剥き出しの Alida から距離を置き、直前の Alida の言葉に対するまともな返答を回避した可能性が高い。

7) Petry は Grace の毛皮の襟巻きを彼女の官能性が露わになったことと関連付けている (Petry 166)。だが、毛皮は必ずしも新しい女の官能性を示すものでもなさそうだ。19世紀の女性にとって、毛皮は防寒アイテムとしてもファッションアイテムとしても、新奇なものではなく、Grace のような上流階級出身の女性が身につけるのにふさわしくないことはない。毛皮の襟巻きは、Old New York の典型的な上流夫人である Wharton の母 Lucretia や Wharton 自身の幼少期や娘時代の肖像や写真でも見ることができ、家族の富、社会的地位を示すアイコンでもあったようだ (Joslin 参照)。

2. 言葉の応酬 —— Babs for Barbs

Lawrence I. Berkove は、結末で Grace が娘 Barbara の出生の真相を暴露したという解釈の上で “Grace’s final retort to Alida is vengeful, and Grace has to have known how deadly it would be” と述べている (58)。現代的魅力に溢れる Barbara を娘に持つ Grace に激しい嫉妬心を抱いてきた Alida にとって、それが自らの偽手紙が招いた Delphin の裏切りの結果だとすれば、彼女の精神的打撃は計り知れないだろう。Barbara に対する Alida の羨望を知る Grace にとっては、“I had Barbara” という発言そのものが報復的であることは確かだろう。

前節で考察したように、Grace は冷静さと思慮深さを取り戻した上で、最後の言葉を発している。だが、「仕返し」としての言葉の効果を考える時、それはあからさまな真実の告白である必要はない。再び Bowlby の指摘を思い出そう。“I had Barbara” という言葉そのものは、字義どおりには、「母」(Grace) と「娘」(Barbara) の関係のみを表し、そこに「彼」(Delphin) は含まれない。Grace は直前の Alida の発言後、沈黙によって「彼」の所有による優位を示すことに固執する Alida の会話の文脈を密かに断ち切っている。その上で「私は(あなたが羨む) Barbara の母である」という自明の事実を表す言葉を使い Alida に「彼」との関係を連想させる Grace は、血を流さず相手の息の根を止める Old New York 流の恐ろしさとしたたかさを彷彿とさせる。真実が何であれ、Grace の言葉は報復としてその機能を十分に果たしている。

Grace の発言の真意についてさらに掘り下げるために、そもそも彼女は何に対して報復したのか再考してみよう。Berkove は、物語終盤の二人の言葉の闘ぎ合いを、古代ローマの剣闘士になぞらえ、文字通り、または比喩的な意味において、Delphin をめぐる二人の女同士の殺し合いとみなしている (Berkove 59)。では、Grace はコロセウムにおける Alida の「殺人未遂行為 (attempted murder)」(Berkove 59)⁸⁾ に対して仕返ししたのだろうか。それはもちろん否定できないが、Grace にとって最も大きな精神的打撃は、彼女にとってかけがえのない Delphin との思い出が壊されたことではなからうか。現在の Grace にとって、Alida がなおも執着する「彼」をめぐる争いの勝敗はもはや意味のないことだと思われる。Delphin の手紙が偽物だったと知り動揺を隠せない Grace に、Alida は “Ah, how you care for him still!” (760; 下線引用者) と苛立ちを募らせる。一方、Grace は、“I cared for that memory” (760; 下線引用者) と、「彼」ではなく「(彼の手紙の) 思い出」が重要だったと返答している。(編み物という武装

8) Alida が 25 年前 Grace を毘にかけようと捏造した手紙は、Grace の「恐ろしく悪意ある大叔母 (a dreadfully wicked great-aunt)」(756) の話 (同じ男性に恋した姉妹の姉が故意に妹を夜間の Forum へ送り「ローマ熱」で死なせたという言い伝え) を借用したものであり、Alida は恋敵である Grace に同じ結果を望んでいたと考えられる。このことに関して、Berkove は Alida の行為に明確な殺意を認め、“murder” という言葉を用いている (Berkove 57-58 参照)。

を取り払った) Grace のこの場面の言葉は本心であろう。燃やしてしまった Delphin の手紙、過去の記憶の聖域で再現されてきたであろう彼の声、それは彼の言葉ではなく Alida の書いた嘘だった—— Grace の言葉が Alida への報復ならば、それは Alida の「嘘」に対してであろうか。

いや、現在において、Alida が過去の「嘘」に対してさらなる偽りの言葉を重ね、彼女を執拗に追い詰めたことに対するものだろうか。Alida が過去の恋愛競争を再現すべく 25 年以上前の手紙捏造を告白したのは、Grace に対する根深い競争心からだった。思惑通りとは言え、Grace の心に深い傷を負わせた Alida は、自らの行いを正当化しようと次のように釈明している。

“I wish now I hadn't told you. I'd no idea you'd feel about it as you do; I thought you'd be amused. It all happened so long ago, as you say; and you must do me the justice to remember that I had no reason to think you'd ever taken it seriously. How could I, when you were married to Horace Ansley two months afterward?” (760; 下線引用者)

この昔話を聞いて「あなたは面白がると思った」—— Grace はその後すぐ Horace Ansley と結婚したので Delphin のことは本気だったはずがない、と Alida はこれみよがしの言い訳をする。さらに Alida は彼女の嘘に騙された Grace を笑い者にしていたことをわざわざ打ち明ける。

“I suppose I did it as a sort of joke——”

“A joke?”

“Well, girls are ferocious sometimes, you know. Girls in love especially. And I remember laughing to myself all that evening at the idea that you were waiting around there in the dark, dodging out of sight, listening for every sound, trying to get in—. Of course I was upset when I heard you were so ill afterward.” (761; 下線引用者)

手紙捏造は「冗談(悪戯)みたいなもの」—— Grace に死をもたらし可能性を意識していた Alida は、自身の嘘の罪深さを“a sort of joke”という軽い笑いにすり替えている。Delphin からの手紙の思い出を奪われた Grace にとってこれほど残酷な言葉の攻撃はないだろう。

そうだとすれば、Grace が最後に Alida を騙す言葉で仕返しすることの意義が読みとれる。Barbara が物語において愛称“Babs”と呼ばれていることは、結末における“barbs”(辛辣な言葉の応酬)を想起させる。Grace の“I had Barbara”は、直前の

Alida の言葉 (“I had everything; I had him [...]”) を修辭的に利用し、実際には娘について何も明かさな絶妙な「冗談」による応酬ではなからうか。

先行する会話において Delphin がコロセウムに現れたことを Grace の口から聞いた Alida は, “Ah, now you’re lying!” (761), “You must be raving!” (761) と Grace の話を信じようとしなかった。Grace の “I had Barbara” を “I had his daughter” と解釈した Alida がもし仮に、再び「嘘だわ!」と応答したとしたら、Grace は Alida が先に使った言葉をそのまま返すことができただろう。「冗談で言ったのよ (I did [said] it as a sort of joke)」, 「あなたが真面目に受け取るなんて思わなかった (I had no reason to think you’ve ever taken it seriously)」—— Grace はこのような言葉を発する必要がなかったわけだが、毛皮の襟巻きをしめた彼女には、Alida の言葉の攻撃をうわべは上品な皮肉に変換する余裕がまだ残されていたように思われる。だが言うまでもなく、Alida が軽い冗談と表現した「嘘」も、それに対する Grace の応酬も、その内実はあまりにも複雑かつ深淵なものであろう。

3. Barbara の父親は誰か

Grace の結末の言葉は、必ずしも真相を露わにするものではない。Grace は何も語らないが、会話の間にコロセウムに意味ありげな視線を向けており、Delphin との密会における秘められた情熱を想起させることは否めない。しかし、小説を注意深く読み直すと、Delphin と Grace, Barbara の三者を結びつける決定的証拠はないことがわかる。

Barbara は Delphin の婚外子だという解釈に結びつく Grace の「病氣」について再考してみたい。Alida は会話の中で, “People always said that expedition was what caused your illness” (757) 等、Grace が日没後のコロセウムに出かけた後病氣になったことに関して繰り返し言及している。この情報に加えて、先に引用した箇所と重なるが、Alida が嘘の手紙を送った自らの悪戯を正当化する場面を再読してみよう。

“[...] you must do me the justice to remember that I had no reason to think you’d ever taken it seriously. How could I, when you were married to Horace Ansley two months afterward? As soon as you could get out of bed your mother rushed you off to Florence and married you. People were rather surprised—they wondered at its being done so quickly; but I thought I knew. I had an idea you did it out of *pique*—to be able to say you’d got ahead of Delphin and me. Girls have such silly reasons for doing the most serious things. And your marrying so soon convinced me that you’d never really cared.” (760; 下線引用者)

Grace はコロセウムに出かけた「2ヶ月後」にフィレンツェで母親が選んだ相手 Horace Ansley と結婚したことがわかる。この急な結婚の説明として、「Grace の病氣

は実は妊娠の初期症状を意味し、母親は嫁入り前の娘の醜聞を隠すために、回復後もなく娘を遠方で結婚させた」という推理が成り立ち、これが従来の結末解釈を支えてきた (Berkove 58, Campbell 128, Mortimer 190 等参照)⁹⁾。しかし、テキスト上の事実をよく観察すると、この推理は完全ではないことがわかる。“You don’t remember going to visit some ruins or other one evening, just after dark, and catching a bad chill?” (757) と Alida が詰問していたように、彼女は自身の目論見どおり恋敵は「酷い風邪をひいた」と信じてきた。この事実を考慮すると、実際 Alida は問題の夜以降 Grace の姿を見なかったのだろう。つまり、Grace のコロセウム訪問と「病気」は時間的に連続して起こったと考えられる。だとすれば、Grace の病は、妊娠の初期症状であるとは考えにくい¹⁰⁾。「ローマ熱」に罹ることはもはや過去の恐怖であったとしても、娘時代に身体の弱かった Grace は、Alida が当初意図したとおり、「死ぬほど寒い (deathly cold)」フォーラムより「さらに寒く湿気が多い (even colder and damper)」コロセウムに夜遅く外出した結果、実際に重症の風邪か肺炎を患ったのだろう (757)¹¹⁾。結局のところ、Grace は文字通り病気だったのだ。

さらに、醜聞の隠蔽工作だと解釈されてきた Grace の母親の迅速な行動も、娘の妊娠をほのめかすものではなく、若い娘に対する絶え間ない監視の結果であろう。「センチメンタルな危険 (sentimental dangers)」(754) から娘を保護する母親像については、Alida が年頃の娘 Jenny に対する母の活躍を (やや冗談めいてはいるが) 望んでいる描写によって具体的に示されている。夫 Delphin の死後、娘 Jenny の母親としての役割しか残されていないことに退屈した Alida は、“Jenny would fall in love—with the wrong man, even; that she might have to be watched, outmanoeuvred, rescued” (753) と想像を膨らませている。Grace と Alida が娘時代、危険の多いローマで「いかに母たちに見張られていたか (how we were guarded)」(754) と話しているように、Alida

9) たとえば Mortimer は “Two months after that evening, apparently having recovered from the “Roman fever” she caught—actually her early pregnancy artfully concealed as a fever brought on by the chill—Grace was hustled off to Florence to marry Mr. Horace Ansley, evidently to give a father to the child she was expecting” と解説している (Mortimer 190)。

10) 一般に知られていることだが、悪阻 (hyperemesis gravidarum) などの重い妊娠初期症状が現れるのは妊娠成立直後ではない。The Johns Hopkins Manual of Gynecology and Obstetrics 等を参照。

11) Sweeney は Wharton の “Roman Fever” と Henry James の *Daisy Miller* の類似点と相違点を指摘している (Sweeney 318-20 参照)。Grace より一世代前の若いヒロイン Daisy は夜間のコロセウムで男性と会った後、ローマ熱にかかり命を落とす。Sweeney の論考を含め、この短篇では Grace はコロセウムでローマ熱にかかったのではなく妊娠したのだと解釈されてきた。しかし、“I remember how ill you were that winter. As a girl you had a very delicate throat” (756) 等、娘時代の Grace の虚弱体質について Alida が繰り返し言及していることから、Grace も Daisy と同じ運命を辿りかけたが奇跡的に治癒したと推測できる。

が思い描くような状況は、現在も過去も、危険な恋から娘たちを守るのが母の任務であるという意識が受け継がれていることを示している。Grace が Barbara のデート先やその相手についてそれとなく知っているように、Grace の母親も娘が “the wrong man” (婚約者がありながら夜間にその友人をデートに誘うプレイボーイ) に恋をしていることに気づいていたと推察される。それならば、Grace の母は恋する娘の行動を監視し、先回りして「危険」を回避すべく、直ちに娘を良縁に結びつけることで「悪い男」から救出するという母の役割を遂行したにすぎない。何より「2ヶ月」で娘を嫁がせたという事実が、母親が娘の妊娠を知ってから行動し始めたのではないことを物語っている。つまり、周囲を驚かせた母の「迅速すぎる行動 (its being done so quickly)」は、Grace と Delphin の密会と娘 Barbara の誕生を結びつける決定的証拠とはなり得ないのである。

Barbara は Alida の娘 Jenny より年上ということは書かれているが、具体的な二人の年齢差や出生時期を読みとれる記述はない。これは Barbara が Grace と夫 Horace の正当な娘である可能性も残したテキスト上の余白であるといえる。このことに関して、再び Alida の娘 Jenny が Grace の娘 Barbara の血縁関係について暗示する役割を果たしているようだ。結末の言葉 “I had Barbara” が、Grace の娘について Alida が抱えてきた謎を解決するものとして読まれる一方で、Alida が自身の娘 Jenny に抱く謎はそのままであることに注目したい。“Funny where she got it, with those two nullities as parents” (751), “how two such exemplary characters as you and Horace had managed to produce anything quite so dynamic” (755) とあるように、現代的で威勢のよい Barbara が古風で退屈な Ansley 夫妻の娘であることを Alida が疑問視していることは繰り返し示されている。Alida の目から見れば Horace の外見上の特徴は “just the duplicate of his wife. Museum specimens of old New York. Good-looking, irreproachable, exemplary” (751) であり、Grace と同じく社交界の模範的な人物だったようだ¹²⁾。一方 Alida は、“exceptional couple” (752) を自認する Delphin Slade 夫妻の娘として、Jenny の凡庸さに戸惑いを隠せない。「なぜ天使を授かったのかまったく理解できない (never quite understood why I got an angel instead)」(755) と、冗談混じりではあるが、実の娘との血縁を疑問視する発言をしていたことも忘れてはならない。このように Alida による娘たちに関する疑問は、そもそも主観的なものであり、将来有望な娘を持つ Grace に対する嫉妬に端を発する思い込みに過ぎないかもしれない。全く似て

12) これは Alida の見方であり、Horace が Grace の視点から描写されることはなく、その実際の人物像は読者の想像にゆだねられている部分が多いと言える。生前の Horace Ansley は、国内外で華々しく活躍した Delphin Slade ほど目立った経済的成功はなかったようだが、もし Horace が Old New York 的な紳士の典型だとしたら、その respectable な外見と内実が一致しているとは限らない。Wharton は Horace の人物像を故意に曖昧にすることで、実際には小説の結末に多様な読みの可能性を与えているのではないか。

いないように見えたとしても Jenny は Delphin Slade 夫妻の实の娘であるという事実は、裏を返せば、Barbara が Horace Ansley 夫妻の嫡出である可能性を示唆するものと読めなくもない。

以上を要約すると、Grace のコロセウム外出後の病気は妊娠ではなく、Horace Ansley との結婚も母親による醜聞隠蔽工作とは判断できず、Barbara と Ansley 夫妻の血縁関係については実は疑わしいものがない可能性すら見えてくる。

4. 失われたゴムバンド —— 束ねられない旅行案内書が意味するもの

本稿の冒頭に触れたように、この短篇は最後に Barbara に関する真相が露わになることで、そこに至るまでの小説細部の意味が再解釈され、全体として一つの物語が完成する、と読まれてきた。しかし、すでに考察したように、Grace は “I had Barbara” という言葉で新たな真実を開示したのではなく、細部の描写は実のところ Grace の過去の病が妊娠ではないことを示している。このことから一つの仮説が導き出せる。作者 Wharton は Barbara をめぐる真相に関しては Alida の認識とは異なる物語を描いていたのではないか。

それを暗示するエピソードが小説終盤に埋め込まれている。Wharton は Alida と Grace の会話为佳境に入る直前のレストランの背景描写に一人の外国人旅行者をさりげなく登場させている。引用の後半に突如現れる女性旅行者の挿話は、物語のプロットとは無関係のように見え、読み飛ばしてしまいそうな箇所である。

The clear heaven overhead was emptied of all its gold. Dusk spread over it, abruptly darkening the Seven Hills. Here and there lights began to twinkle through the foliage at their feet. Steps were coming and going on the deserted terrace—waiters looking out of the doorway at the head of the stairs, then reappearing with trays and napkins and flasks of wine. Tables were moved, chairs straightened. A feeble string of electric lights flickered out. Some vases of faded flowers were carried away, and brought back replenished. A stout lady in a dustcoat suddenly appeared, asking in broken Italian if any one had seen the elastic band which held together her tattered Baedeker. She poked with her stick under the table at which she had lunched, the waiters assisting. (760-61; 下線引用者)

Alida と Grace が昼食後留まり続けているレストランのテラス席では、ウェイターたちが夜の営業への切り替え準備を始めている。そこへ突然一人の外国人女性が現れる。物語の冒頭でテラス席に残っていた最後の旅行者グループの一員であると思われるその女性は、「片言の (broken)」のイタリア語で、「ぼろぼろに破れた (tattered)」旅行案内を束ねるゴムバンドについて尋ねているが、彼女の探し物は見つからない。この

寸劇的描写は隠された結末の予告ではないだろうか。旅行者のガイドブック¹³⁾が、ローマを再訪した二人のアメリカ人女性の過去の断片を組み合わせる本作の隠喩だとすれば、ばらばらになった頁を一束にする小さなゴムバンドは、結末の“I had Barbara”を想起させるものである。このバンド紛失は、結末の3語の言葉が、実際には物語細部の断片を一つに統合しえないことを示唆しているのではないか。そうだとすれば、Barbaraの父親は小説を一つの明快な着地点に導くように見えるDelphinではなく、この恋愛物語のプロットにおいて些細な脇役にすぎないように見えるHoraceということになる。

AlidaはGraceの最後の言葉を、BarbaraがDelphinの娘であることを意味するものと受け止めた。しかし先の議論で示したように、Graceは字義通り、彼女がBarbaraの母であるという自明の事実を表す言葉をAlidaに返したにすぎない。Whartonは、真相について何も語らないGraceにAlidaが言い負かされた、というよりむしろ、密かに騙された話を想定していたのだろう。

おわりに

1934年に大衆雑誌*Liberty*に掲載された本短篇は、幅広い読者層に楽しめることを前提に創作されたと思われる。Graceの曖昧さ、判断としない状況に、「もう我慢できない(I simply can't bear it any longer—!)」(758)と言ってしまうAlidaの視点で読者が誘導されるのは、この作品が表向きは軽妙で痛快なゴシップとして読める小品を意図して作られたからだろう。お上品な貴婦人の仮面が剥がれ、衝撃の結末がもたらされる——そのスキャンダルが真実であろうとなかろうと、この短篇はプロットも仕掛けもよくできた「面白い話」であることに変わりない。だが、晩年のWhartonは、読者に受容されやすい作品を意図しつつも、彼女の創作の原点にあるOld New York的な精神を受け継いだ女性登場人物としてGraceの姿に一貫性を持たせていると考えられる。結末の“I had Barbara”は一種の冗談^{ジョーク}としてAlidaの嘘に対する報復の機能を果たしているが、この発言そのものは真相を明らかにするものではない。

もしWhartonが娘Barbaraに関する真実を想定していたのだとしたら、それは結末の言葉にあるのではなく小説細部に示されているのだろう。本稿の議論を集約すると、BarbaraはGraceとHoraceの実娘だったと考えられる。つまり、Alidaが結末で問題

13) Whartonは*The Writing of Fiction* (1925)の“Telling a Short Story”において、読者を旅人に喩え、短篇小説には「道標 (sign-post)」が必要であると述べている。“One of the chief obligations, in a short story, is to give the reader an immediate sense of security. Every phrase should be a sign-post, and never (unless intentionally) a misleading one: the reader must feel that he can trust to their guidance” (*The Writing of Fiction* 30). 引用の括弧内にある“unless intentionally”という表現が控えめのものでいて、かえって強調されているように見える。Whartonが故意に読者をmisguideする作品は少なくないからだ。

にする「彼」をめぐる勝負において、真実を言えば Grace は負けていたのだ。だからこそ、Grace にとって Delphin の言葉だと信じてきた唯一の手紙の思い出が何より重要だったのだ。Grace は Alida の筋書きにおいて敗北したかもしれないが、過去においても現在においても、自らが彼女の筋書きに書き加えた言葉（嘘の手紙への返事/冗談^{ジョーク}の応酬）で最終的に勝利したと言えよう。負けても負けを見せない Old New York レディの戦略がこの結末の裏に隠されているのだとすれば、それは新進作家が台頭する新たな文学界の潮流の中「古風な」作家として深い人物造形と言葉の力で闘い続けた晩年の Wharton の姿と重なるようだ。この点については稿を改めることにしよう。

引用文献

- Bauer, Dale M. “Edith Wharton’s ‘Roman Fever’: A Rune of History.” *College English*, vol. 50, no. 6, 1988, pp. 681–93.
- Berkove, Lawrence I. “‘Roman Fever’: A Moral Malady.” *CEA Critic*, vol. 56, no. 2, 1994, pp. 56–60.
- Bowlby, Rachel. *A Child of One’s Own: Parental Stories*. Oxford UP, 2015.
- Campbell, Donna. “The Short Stories of Edith Wharton.” *A Companion to The American Short Story*, edited by Bendixen, Alfred, and James Nagel. Wiley-Blackwell, 2010, pp. 118–32.
- Chou, Betty, et al, editors. *The Johns Hopkins Manual of Gynecology and Obstetrics*. 6th ed. Wolters Kluwer, 2021.
- Gerlach, John. *Toward the End: Closure and Structure in the American Short Story*. U of Alabama P, 1985.
- Hoeller, Hildegard. *Edith Wharton’s Dialogue with Realism and Sentimental Fiction*. UP of Florida, 2000.
- Joslin, Katherine. *Edith Wharton and the Making of Fashion*. U of New Hampshire P, 2009.
- Lewis, R.W.B. *Edith Wharton: A Biography*. Fromn, 1985.
- Mortimer, Armine Kotin. “Romantic Fever: The Second Story as Illegitimate Daughter in Wharton’s ‘Roman Fever.’” *Narrative*, vol. 6, no. 2, 1998, pp. 188–98.
- Petry, Alice Hall. “A Twist of Crimson Silk: Edith Wharton’s ‘Roman Fever.’” *Studies in Short Fiction*, vol. 24, no. 2, 1987, pp. 163–66.
- Phelan, James. “Narrative as Rhetoric and Edith Wharton’s *Roman Fever*: Progression, Configuration, and the Ethics of Surprise.” *A Companion to Rhetoric and Rhetorical Criticism*, edited by Jost, Walter, and Wendy Olmsted. Blackwell, 2004, pp. 340–54.
- Sweeney, Susan Elizabeth. “Edith Wharton’s Case of Roman Fever.” *Wretched Exotic: Essays on Edith Wharton in Europe*, edited by Joslin, Katherine, and Alan Price. Peter Lang, 1993, pp. 313–31.
- Wharton, Edith. “Roman Fever.” *Edith Wharton: Collected Stories 1911-1937*. Library

of America, 2001, pp. 749-62.

———. *The Writing of Fiction*. Simon & Schuster, 1997.

White, Barbara. A. *Edith Wharton: A Study of the Short Fiction*. Twayne, 1991.